

研究分野のキーワード：中国思想，諸子百家，老荘思想，表現形式，先秦文学

## 研究紹介

「本当に大事なものは、ことばにできない。」

このような言い回しを耳にしたり、自分でふと考えたりすることはありませんか。

逆に言えば「ことばにできないものが本当に大事なもの」となるわけですが、その正否はともかくとして、「ことばにできない」ということは、何か人を引きつける魅力を持っているようです。それはいったい何なのでしょう。

一つの原因は、ことばの持つ、「差異の体系」としての性質、世界を切り分ける性質にあると思われます。たとえば、ある人を「兄」と呼んだ（名づけた）とき、その「兄」は他のもの、「弟」や「姉」や「父」や「母」などとは異なるものとしてことばの体系を構築し、それに組み入れられます。名づけられることで、はじめてその概念は、無限定な世界から切り離されて、立ち現れてくるのです。一方でそれは、他と比べられるもの、すなわち相対的なものとなってしまったということでもあります。ことばにされる前の、とらえることのできない自由さ、無限の生命力を失ってしまったとも言えるのです。古今東西の宗教や哲学において、「ことばにできない」ことがしばしば絶対性を支える重要な属性とされるのはおそらくこのためでしょう。

ところで皆さんは、古代中国の「諸子百家」について聞いたことはありますか。今からおおよそ 2500 年前、春秋戦国時代の中国で活躍した思想家たちの呼び名です。私は、その中でも、老子や荘子など、「道家」と呼ばれる思想家たちを中心に研究をしています。

道家の思想家たちは、この世界の根源にある存在・理法を「道」と呼び、それについて考えました。彼らにとって「道」は、「ことばにできないもの」であり「名づけられないもの」でありました（「道」というのも、あくまで仮の名前なのです）。

ここで皆さんは不思議に思わないでしょうか。ならば道家の思想家たちは、どのように「道」について考えたのでしょうか。道家の代表作である『老子』や『荘子』は、日本人にとっても馴染みのある古典の一つです。それらは「道」を語ったものなのではないでしょうか。しかしことばにできないものを語ってしまって良いのでしょうか。

実は、これは道家にとっても重大な問題でした。彼らは、ことばにできない「道」をことばにするという、おおよそ不可能にも見える課題を前にして、様々な工夫を凝らしました。

それは成功したのでしょうか。

『老子』の原文はたった 5000 字ほどです。そして『老子』にも『荘子』にも、優れた日本語の訳注が複数存在します。ですから、皆さんにはぜひ自分の目で確かめて欲しいと思います。

少なくとも、2500 年後の異国の我々が、そうして道家の人々の思想に触れられるのは、彼らが、ことばにできない「道」を語ることをあきらめなかったからに他ならないのですから。